

# 知識探訪

多民族社会の横顔を読む



【第23回】

杉本均(すぎもと・ひとし)

京都大学大学院教育学研究科教授

## マレーシアの高等教育の世界戦略

一昔まえ、マレーシアといえば世界有数の留学生送り出し国で、マレーシア人留学生が世界中にあふれていた。それが今や、マレーシアの大学やカレッジに外国人留学生の姿が増え、国際的にもマレーシアは留学生の受け入れ国に変貌しつつある。

その背景にはマレーシアの高等教育戦略の大きな転換がある。現在マレーシアには11校の公立大学と60校の公立カレッジがあり、私立セクターでは11の大学と5つの外国大学分校を含む、516校の私立カレッジが存在している(2008年)。1996年まではマレーシアでは私立大学の設置が事実上制限されていたので、高等教育といえば国立大学数校のみという時代が続いていたが、その頃から現在を見ると隔世の感がある。

1990年代当時の高等教育進学率は3%で、大学生といえはかなりのエリートであったが、これはブミプトラ学生の比率をあげるために、大学の設立が意図的に制限されてきたからである。大学の数が無制限に拡大されては、奨学金の効果は半減してしまう。その結果、狭き門から閉め出された非ブミプトラ学生は、私費留学生として海外を目指し、一方、政府も奨学金によって大量のブミプトラ学生を各国に派遣したので、人口2000万の国が留学生送り出し大国として名を馳せたのである。しかしこれは当然ながら膨大な外貨の流出を招き、国家の文教予算に匹敵するほどの留学コストが毎年失われてきた。政府は世界的経済危機に臨んでその政策を大きく転換せざるを得なかった。

もうひとつの背景はグローバル化による国際サービス貿易の発展であり、その一形態である高等教育が国境を越えて大きく展開し始めたのである。留学コストを削減するためにまず、外国学位の基礎課程1~2年間をマレーシア国内の提携カレッジで履修するトウィニング・プログラムが誕生した。これによって留学費用が3割程度安くなった。さらに全課程をマレーシア国内で履修できる外国大学の分校が進出してきた。取得できる学位は外国の大学の正規の学位である。国内物価や人件

費が安く、英語を話すマレーシア人講師で授業が維持できる点がこのプログラムを可能にした。

こうした

いわゆるトランスナショナル教育が人気を博し、同じ学位が取れるなら、なにも外国に渡航しなくても、という留学概念の根本的な転換が起こった。そしてその過程で、マレーシアは自らの国際競争力に気づいたのである。すなわち、生活コストが比較的安く、英語が通じ、外国大学との提携実績があり、治安がいい。これは第三国からの留学生にとっても魅力的な環境であった。先進国の大学学位をマレーシア国内で安く取得できるという点を武器にして、このコースに留学生を誘致すれば、外貨の獲得につながる。マレーシアがイスラム圏であることを考慮すると、マーケットは中東からの留学生にまで広がる。私はこれを「中継貿易型留学」と呼んでいる。現在マレーシアへの留学生数は4万人を越え、その大学等の留学生比率は5.6%を越えている(2005)。これは人口1億2,000万の日本への留学生が12万人、留学生比率が3.8%という数字を考えると、どちらがより国際競争力があるといえるだろうか。

### 【プロフィール】

1958年静岡生まれ。京都大学大学院教育学研究科教授。比較教育学専攻。京都大学卒、マラヤ大学留学、英国レディング大学Ph.D.(地域・教育研究)。マレーシア、シンガポール、中国、インドなどアジア諸国の教育を国際関係の観点から研究している。マレーシアの研究トピックは高等教育流動、イマージョン教育、ビジョン・スクール、イスラム高等教育、華人教育ネットワークなど。



オーストラリア名門モナシュ大学の学位が取得できるモナシュ大学・サンウエー分校